

哲學研究

第二百二十號

第十九卷
第七號

辯證法的—般者としての世界

西田 幾多郎

四

上に述べた如く、私の辯證法的—般者の自己限定といふものは、我々の内的統一と考へるもの、内部知覺といふものから考へることによつて、一層明にすることができると思ふ。そこに我々の體驗と考へるものと、論理との結合も明にすることができるのである。個物とは自己自身を限定するものでなければならぬ。自己自身を限定するといふことは、自己の内から自己を限定するといふことではなければならぬ。自己の内から自己を限定するといふことは、部分が全體の意味を具するといふことである、一層強く云へば部分が全體を限定することである。斯く考へれば考へ

る程、我々は自己の内から自己を限定すると考へることができる。我々の内部知覺の統一と考へられるものは、かゝる意味を有つたものでなければならぬ。具體的一般者と考へられるものはかゝる意義を有つたものである。部分が獨立と考へられないかぎり、内から限定するといふ如きことは考へられない。それは我ではなくして物である。そして自己自身を限定するものが個物と考へられるかぎり、それは個物といふものでもない。

個物は何處までも獨立に自己自身を限定するものでなければならぬ。我々の內的統一と考へられるものに於ても、その一々の點が獨立と考へられねばならぬ。時に於ても一々の瞬間が獨立と考へられねばならぬ。併しかゝる方向に徹底するに於ては、各の點が結び附かないものとならなければならぬ。併し個物は個物に對することによつて個物となるのである。個物は媒介せられたものでなければならぬ。時の各の瞬間も媒介せられたものでなければならぬ。然らざれば瞬間といふものもない。我々の表現と考へるものは、かゝる場合の媒介者の意義を有つたものである。絕對に相獨立するものを媒介するものが表現と考へられるのである。私と汝とは內的にも外的にも結び附かないものである。而も私と汝とは言

表によつて相交はると考へられるのである。斯くして我々に表現的世界といふものが考へられるのである。表現的世界といふのは、何等の個物的限定の意義を含まない世界ではない。我々に世界と考へられるものは、何處までも辯證法的な一般者の性質を有つてゐなければならぬ、Mの自己限定の意義を有つてゐなければならぬ。唯、一面に個物と個物とが絶對に相獨立するものとなるといふこと、絶對に結び附かないものとなるといふことは、個物は個物に對立せぬといふことを意味し、個物が無媒介的となるといふことを意味する。而してそれは個物といふものがなくなるといふことを意味する。従つてそれは何等の内的統一をも有せぬといふことを意味する。故に我々の表現の世界と考へられるものは、それ自身に於て何等の自己限定を有たない世界と考へられるのである、何等の内的統一を有たない世界と考へられるのである、單なる意味の世界とも考へられるのである。併し苟も一つの世界と考へられるかぎり表現の世界といへども、何等かの意味に於てそれ自身の限定を有つたものでなければならぬ、内的統一を有つたものでなければならぬ。かゝる内的統一といふものが我々の意識と考へられるものである。各人が各人の意識を有つといふ様に考へられるが、意識といふのは各人に屬するものではなくし

て、一種の公の場所でなければならぬ。各人の意識といふものはかゝる意識面の個別的に考へられたものである。右の如き表現的世界の自己限定、表現的一般者の自己限定といふものが、了解と考へられ、又志向作用と考へられるのである。我々の意識は物を映すと考へられるが、個物的限定といふものがなければ、未だ客觀的に物といふものもない、眞の對象といふものもない、従つて未だ物を映すといふこともない。併しかゝる世界といへども、一種の內的統一の意義を有するが故に、かゝる立場から、内から外に對して志向的と考へられ、外から内に對して了解と考へられるのである。かゝる世界には未だ映すとすらいふこともなければ、況して見るといふこともない、内部知覺といふものもない、全く時のない世界である。併しかゝる世界といへども、自己同一的に自己自身を限定するものとして尙見るといふ意味を有つてゐなければならぬ。それも現實の世界の自己限定として成立するものなるが故に、内部知覺に即して我々は純なる意識の立場に於てザツハリツヒなるものを見ると考へられる。現象學的立場といふのはかゝるものではないかと思ふ。

個物が個物自身を限定すると考へられる時、一面に個物と個物とは互に獨立と考へられねばならぬ。而してそこには何等の內的統一といふものは考へられない、却

つて個物といふものはなくならねばならない。辯證法的一般者の自己限定として右に云つた如き表現の世界が成立せなければならぬ。我々の現實の世界といふものが、一面に何處までも表現的と考へられねばならない所以である。この世界が表現的であるといふことは、この世界が單なる意味の世界だとか、意識の世界だといふことを意味するのではなくして、却つてそれが一面に個物を否定するといふ意味を有つて居ること、何處までも我々の内的統一を破るといふ意味を有つて居ることを意味せなければならぬ。世界の底に、無限に暗いもの、非合理的なるものを見るといふことを意味するのである(所謂物質と考へられるものは、眞に非合理的なものでない)。而も表現といふものは單に了解の對象といふ如きものではなくして、我々を唆すもの、動かすものである。我々の自己は言葉によつて呼び起されるときも考へられねばならない。個物が個物自身を限定するといふことは、個物とは他から限定せられないもの、個物とは獨立なもの、無媒介的なるものといふことを意味する。併し個物は然考へられねばならないと共に、個物は個物に對することによつて個物であり、個物は媒介せられたものでなければならぬ。個物と個物と相互限定の世界として現實の世界といふものが考へられるのである。逆にMの自己限定として、個

物といふものが考へられるのである。而してMの自己限定といふことは、我々の内部知覺的統一に於て考へられる様に、個々獨立なるものが一であるといふことである。個々獨立するものが一であるといふことは、個物が自己自身を肯定することが自己自身を否定することであり、逆に自己自身を否定することが肯定することであり、それは主客合一的に物を見るときといふことである。一體、我々が現實に物を見るときといふことは、かゝる矛盾の統一を意味して居るのである。物が絶對に我々の自己を離れたもの、我々の自己の外にあるものならば、我々は物を見るときといふことはできない。之に反し、單に物が我々の自己の内にあるものならば、又我々は物を見るときといふことはない。故に我々が現實の底に深く我々を越えたもの、超越的なるものを見ることと考へれば考へる程、我々の深い自覺と考へられるものが成り立つのである。行爲によつて物を見ると考へられるのは、之によるのである。我々が超越的なるものに接するといふことは、物を離れるといふことではなくして、深く物に入ることである。個物が個物自身を否定することが個物が個物自身を肯定することであるといふ意味に於て、Mの自己限定として自己同一的に自己自身を限定するものが見られるかぎり、内部知覺といふものが成立する。故に内部知覺といふものは、いつも外部知覺

に即して成立する。我々の内部知覺的自己といふものは、何處までも自己が自己を見るといふ意味を有しながら、何處までも自己を見ることができないものである。絶對辯證法に於ては、個物が個物自身を否定するといふ否定の意味は絶對でなければならぬ。之と共にその肯定の意味も絶對でなければならぬ。故に絶對に限定するものなき限定として、現實が現實自身を限定する、有るものは主觀的客觀的として、此の世界は自己同一的に、直觀的に自己自身を限定する。それが即物辯證法である。すべて有るものは否定面に屬すると考へられると共に、肯定面に屬すると考へられる、外部知覺に屬すると共に、内部知覺に屬すると考へられる。現實にあるものは何處までも個物的であると共に、絶對の個物ではない、何處までも一般的なると共に、絶對の一般ではない。個物的・一般的・個物的としてすべて特殊である。有るものが個物的として、個物が個物自身を限定すると考へられるかぎり、内的統一といふものが成り立つ。内的統一といふことは、互に獨立するものが一であるといふことである。記憶といふことも、互に獨立なるものが一つに結び附くといふことを意味するのである。歴史家が種々なる史料から歴史を構成するのも一種の内的統一である。アウグスチヌスがすべてが記憶の中にあると云つたのも、かゝる意味に解せ

なければならぬ。表現的なるものは既に個物的限定の意義を有つたものである。それで外部知覺といふものなくして、内部知覺といふものもない。内部知覺は外部知覺に即して考へられる。それが從來の心理學者の考でもあつた。併し從來の心理學者の多くは、外部知覺を基として内部知覺を考へた、物の世界を基として心の世界を考へた。併しかゝる考に徹底すれば、我々の内的統一と考へるものは單なる意味的統一といふものとならざるを得ない。自己といふものの實在性はなくなるの外ない。内部知覺といふものも考へられない。そしてそれと共に、外部知覺といふものもなくならねばならない。ここでは實在の世界といふものは考へられなくなる、物の世界といふものはなくなる。それは單に嚮に云つた表現の世界といふ如きものとならなければならぬ。外的知覺として現れるものが何處までも外的として我々の自己を否定するもの、物の意義を有するには、却つて我々の一般的と考へるものを破る意味を有つたものでなければならぬ、一般的法則を破る意味を有つたものでなければならぬ、創造的なものでなければならぬ。それは自己自身を限定する個物の意味を有つたものでなければならぬ、内部知覺的に自己自身を限定するものでなければならぬ。世界は内部知覺的に(故に時間的に)自己自身を限

定すると考へることができ、内部知覺的なるものが創造的と考へられるのである。唯心論的哲學といふものも成立する所以である。併し外部知覺を離れた内部知覺といふものもない。一般的限定を離れた個物的限定といふものがあるのではない。内部知覺即外部知覺、外部知覺即内部知覺として、我々の知覺の世界といふものが成立するのである。而してそれは自己自身に同一なるものとして、辯證法的に自己自身を限定する一つの直觀の世界と考へられる。我々の自己はそこに没すると共に、そこから成立すると考へられる。我々は是に於て始めて一つの客觀界を有つ、物の世界を有つ。知覺的對象と考へられるものは、かゝる世界に於て考へられるものでなければならぬ。すべて對象といふものは、自己に對し自己に反すると共に、自己を限定する意味を有つたものでなければならぬ。そこには對象が我々に直證的と考へられるのである、我々が我々に直證的世界を有つのである。我々の内部知覺的自己といふものも、かゝる知覺の世界の個物的限定として考へられるものでなければならぬ。そこに我々の内部知覺的自己の實在性があるのである。

我々に知覺の世界と考へられるものは、一面に内部知覺的であり、一面に外部知覺的であり、一面に内界に屬すると考へられ、一面に外界に屬すると考へられ、辯證法的

世界の自己限定として直觀的に自己自身を限定する。於てあるものは主觀的客觀的、客觀的、主觀的として、我々は始めて實在の世界といふものを考へる。併し辯證法的なるものは絶對辯證法的でなければならぬ、相對的辯證法的なるものはあり得ない。この故にヘーゲルの辯證法も、マルクスの辯證法も眞の辯證法でない。内界と外界とは何處までも結び附かないものでなければならぬ、直線的限定と圓環的限定とは無限に結び附かないものでなければならぬ。我々はこの直覺的世界に於て内部知覺的方向に無限に内部知覺的なるものを見、外部知覺的方向に無限に外部知覺的なるものを見る。それと共にこの世界は何處までも深く直觀的に自己自身を限定し行くのである。翻つて無限定的なる表現の世界といふものを考へて見るならば、單なる表現の世界といふものも、それ自身に於て成立するものではない、唯かゝる直覺的世界に即して見られるものである。かゝる直覺の世界から個物的限定の方向を、内的統一の方向を否定し行くことによつて、單なる表現の世界といふ如きものが成立するのである。即ち内部知覺に即して内部知覺的自己の自己限定の意義を否定し行くことによつて表現の世界が見られるのである。併し何處まで否定して行つても、表現の世界といふものが見られるかぎり、絶對に内部知覺的なるもの

を否定することはできない。その極限に於て、内部知覺的なものは單なる了解と考へられ、意識は單に志向的と考へられるであらう。併し内部知覺といふものは、固直覺的世界の内の統一の意義を有するものなるを以て、同時に何處までも外部知覺的意義を脱するものではない。是に於て我々の意識は映すものと考へられる。我々の意識が映すものと考へられるのは、内部知覺と外部知覺とが相即的であることを意味するのである。かゝる意味に於て内部知覺的自己が單に映すものと考へられる時、直覺的に我々は事物的なるものを見ると考へられるのである。そこには物を見るときといふことも考へられない、況して事實的なものを見るときといふことはできない。さういふ立場からは、實在界といふものは論せられない。

私は知覺の世界と考へられるものに於て、始めて實在の世界を有つと云つた。我々に知覺の世界と考へられるものは、内部知覺的たると共に外部知覺的であり、外部知覺的たると共に内部知覺的であり、我々はそれに於て直覺的に物を見る。それは個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定として、辯證法的世界と考へられるものである。我々はそれから限定せられると考へられると共に、我々はそれを限

定すると考へるものである。併し眞の辯證法的世界、眞の現實の世界に於ては、上にも云つた如く、個物的限定は何處までも個物的でなければならず、一般的限定は何處までも一般的でなければならぬ。個物は何處までも獨立に自己自身を限定するもの、自己自身を限定することによつて他を限定するもの、即ち働くものでなければならぬ。我々の自己は單に内部知覺と考へられるものではなくして、行爲するものでなければならぬ。それと共に、一般的と考へられるものは、單に外部知覺的といふべきものではない。それは何處までも我々の外部知覺を越えたものでなければならぬ、外部知覺を越えたと共に内部知覺を越えたものでなければならぬ、我々の意識を越えたものでなければならぬ。それは何處までも我々の自己を否定する意味を有つたものでなければならぬ。そこに我々は外界的實在といふものを考へるのである、自然とか物理的實在とかいふものを考へるのである。知的自己の立場に立つ人は、そこには最早見るといふことはなくなると考へる、知覺的なるものはなくなると考へる。併し物理的世界といへども、何處までも我々の知覺的なるものを離れるのではない。全然知覺の世界を離れるならば、それは實在的といふ意味を失はなければならぬ。唯この辯證法的世界に於て、何處までも個物的限定の

意義を否定して行くといふに過ぎない、人間的なるものを否定して行くといふに過ぎない。之に反し我々の行爲と考へるものは、單に我々の意識の底から起るものではない、單に直線的限定から起るものではない、現實の世界の外から起るものではない。内と外、主觀と客觀とが絶對に相反するものでありながら、而も内から外を動かすといふことは考へられないことである。夢といへどもこの世界を離れたものではない。之に反し物理學的認識といつても、客觀界を構成し行く意味を有つて居るのである。加之、それは知覺的に物を見るといふ意味をすら有つて居るのである。それが物理學者の物理的意義といふものである。無論、現今の物理學に於ては、物理的意義といふ如きものは考へられないと云ふでもあらう。併し然考へられるならば、それはこの社會的歴史的世界を離れて、物理的實在界といふものが別にあるのではないといふことを意味せなければならぬ。それはこの個物的一般なる辯證法的世界から、數學的に考へられたものといふことを意味せなければならぬ。行爲に於ては、我々は行爲によつて外に物を見るのである、而して外に見られたものが又我々を動かすのである、我々の行爲を限定するのである、主觀が客觀を限定し、客觀が主觀を限定するのである。我々の行爲は形成作用でなければならぬ。かゝる形

成作用といふものは、現實が現實自身を限定することから考へられる。我々の行爲は常に知覺の世界に即して考へられるのである。我々の知覺の世界といふのは、内部知覺的なると共に外部知覺的にして、物を見るときいふ意味を有つて居ると云つたが、眞に具體的なる知覺の世界といふものは、單にそれだけのものでもない。それは衝動的でなければならぬ。我々の内部知覺といふものは、單に知的なる自己意識といふ如きものではなくして、既に衝動的でなければならぬ。従つて物といふものも、單に知覺の對象といふ如きものではなくして、既に欲求の對象といふ意味を有つてゐなければならぬ。我々に知覺の世界、物の世界と考へられるものは、生物的生命の世界といふ意味を有つたものでなければならぬ。それに於ては、環境が個物を限定し、個物が環境を限定し、既に形成作用の意義があるのである。單に知的に考へられる知覺の世界といふものは、尙抽象的たるを免れない。右の如き意味に於ての知覺の世界と考へられるものは、Mの自己限定として何處までも深まると考へることができぬ。その個物的限定の意義が深まるに従つて、個物は何處までも個物自身を限定すると考へられ、我々の行爲といふものが考へられるのである。併しこの世界が個物的限定の方向に於て深まるといふことは一面に於て一般的限定の方

向に於て廣がるといふことを意味してゐなければならぬ。而してそれは何處までも自己同一的に物を見るといふ意味を失はないのである、否、益、深い意味に於て物を見るのである、直觀の意義が深まるのである。無限なる個物的限定と一般的限定との對立は、却つて世界が自己同一的に、直觀的に、自己自身を限定するといふことから考へられるのでなければならぬ。

我々の知覺の世界と考へられるものは、内部知覺的たると共に外部知覺的でなければならぬ、個物的に自己自身を限定すると共に、一般的に自己自身を限定するものでなければならぬ。而してそれは個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定として、衝動的に自己自身を限定する。かゝる世界の自己同一的限定、その内的統一と考へられるものは、先づ生物学的である。我々が物を見るといふも、物は我々の運動の抵抗として見られるのである。眼の筋肉の運動といふものなくして、物の形といふものは見られない。知覺の世界といふのは、我々の意識に映されたる平面圖の如きものではなくして、立體的でなければならぬ、否、それ自身の重さを有つてゐなければならぬ、我々の生命を限定する意味を有つて居るのである。我々が知覺の世界を實在的と考へるのは之によるのである。かゝる世界に於て、我々の生物

的生命の世界といふものが考へられるのである、而して生物の動作は本能的と考へられるのである。かゝる世界の個物的限定と考へられるものは身體的である。而して生物は外に物を見る、生物は何等かの意味に於て感官を有つてゐなければならぬ。而も單なる生物によつて本能的に外に見られるものは、單に食物的でなければならぬ。斯く外的知覺に即して自己自身を辯證法的に限定する知覺の世界が見られる時、生物的生命の世界といふものが考へられる。生物的生命といふものも、現在が現在自身を限定することから考へられねばならない、現在の底に無限の生命を見るのである。合目的の世界といふものは、斯くして考へられるものでなければならぬ。生物の本能的動作に於ても、働くことが見ることであり、我々が一步一步に物を見て行くのである。而してそこに世界が世界自身を形成する形成作用の意味をも有つて居るのである。併しそれは外に物を造るといふ意味を有たない。ポイエシスの意味を有たない、自己自身の動作の目的を自覺してではない。我々の行為と考へられるものに於ては、之に反し我々の意識的自己を否定し、我々の内を否定し、外に物を造るといふ意味を有つて居るのである、主觀的客觀的なるものを見るといふ意味を有つて居るのである。故に我々の行為と考へられるものは、何處までも

表現作用の意味を有つて居るのである。我々が一つの個物的自己から出て又一つの個物的自己に還ると考へられる時、合目的的作用といふものが考へられるであらう。その場合は過程は何等の客觀的意義をも有たないと考へられる。併し我々が自己自身の個人的存在の爲に働くと考へられる場合に於ても、その個人的自己の存在といふものは、この主觀的客觀的世界、現在の世界に於て見られるものでなければならぬ。然らざれば、それは動物の無意識的作用と異なる所はない。又之に反し、唯心論者の考へる様に、世界が我々の意識の内にあると考へるならば、合目的作用といふものも考へられない。我々が自己の身體を養ふと考へる場合でも、自己の身體といふものは、客觀的存在でなければならぬ。又道德的行爲といふ如きものに於ても、我々は外に何物かを見なければならぬ。ヘーゲルが道德的實在、ジットリヒカイトといふ如きものを、道德的行爲の目的と考へた所以である。所謂抽象的道德、モラリテートといへども、人格の社會的・歴史的實在性に於て、その道德的意義を有つと考へられなければならない。我々の行爲と考へられるものは、何處までもこの辯證法的世界の自己限定、即ち世界が世界自身を限定する形成作用の意義を有つて居るのである。我々の個人とか主觀とかいふものも、かゝる世界の自己限定によつ

て成立するものに過ぎない。我々の行爲の動機は單に内から起るものでない、然らばと云つて單に外から與へられるものでもない。故に我々は我々の行く所を知らない。我々は行爲的自己としてこの現實の世界に卽し、見ることによつて働き、働くことによつて見て行くのである。そこに藝術的創作作用の如き意義があるのである。否、藝術的創作作用といふものは、かゝる意味に於ての一種の行動でなければならぬ。

無論同じく見ると云つても、我々が外部知覺に卽して殆んど無意識的に物を見るといふことと、道德的行爲に於て道德的實在を見るといふことと、又藝術的直觀といふ如きことと、それ等の間に大なる區別があるであらう、否相反するものがあるとも考へられるであらう。唯、私が此處に見られるものとか、直觀的とかいふのは辯證法的、一般者の限定として自己同一的に自己自身を限定するものを意味するのである、現在が現在自身を限定するといふ意味に於て有るものを意味するのである。辯證法的に自己自身を限定する世界に於て、種々なる方面に卽して、種々なる意味に於て、自己同一的に自己自身を限定するものが見られるのである。併しこの現實の世界に於てあるものは、何處までも主觀的・客觀的でなければならぬ。藝術品から商品

に至るまで、かゝる意味に物と考へられるものでなければならぬ。それは我々が知覺の世界に於て、内部知覺的外部知覺的に物と考へるものと同様の意義を有つて居るのである。社會的の制度や現象學者のザツへといふものに至るまで、同様の意味に於て物の意義を有つて居るといふことができる。普通に我々は知覺的なるものを特に物と考へるが、見方によつては、知覺的なるものは却つて一種の心像と考へることもできる。若し單に知覺的なるものを物と考へるならば、商品といふ如きものは物とは考へられない。

五

現實の世界が現實の世界自身を限定するといふことは、辯證法的の一般者の自己限定と考へられるものであり、辯證法的の一般者の自己限定といふのは、個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定として、個物が一般であるといふことを意味する。而も個物が一般であるといふことは、主語的方向に、ノエマ的方向に自己同一なるものを考へるといふことではなく、又單に無限なる辯證法的過程を考へるといふことでもない。個物的限定といふのは無限なる直線的限定を意味し、一般的限定といふ

のは無限なる圓環的限定を意味する。併し個物は個物に對するといふ意味に於て、個物的限定の意味が具體的となればなる程、直線的限定は圓環的限定の意味を有し、一般がその外延的意味に於て個物を包むといふ意味に於て、一般的限定の意味が具體的となればなる程、圓環的限定は直線的限定の意味を有つて來る。一般的限定即個物的限定、個物的限定即一般的限定として、個物が一般であるといふことは、かゝる意味に於てMの自己限定と考へられなければならない。眞の具體的一般者の自己限定は場所が場所自身を限定すると考へられねばならぬ。かゝる限定から相反する兩方向に無限なる直線的限定と無限なる圓環的限定とが考へられるのである。かゝる意味に於て自己自身を限定するものが、自己自身に同一なるものと考へられる。我々の自己の自己同一と考へられるのも、場所的限定として、意識の野の自己限定として考へられるのでなければならない。世界は自己同一的に自己自身を限定する、それが我々に直觀的と考へられるものである。直觀的といふのは、普通に藝術的直觀に於て考へられる如く、我々が自己自身を失つて向にのみ物を見るといふ如きことではなくして、行爲によつて物を見るといふことである。我が物を限定し、物が我を限定する。眞の直觀は無限の過程でなければならない。世界が自己自身を自己

同一的に直觀的に限定するといふことが形成作用といふことであり、我々の行爲といふものも、かゝる意味に於て形成作用の意味を有つてゐなければならぬ。かゝる意味に於て無限に自己同一的に自己自身を限定する世界は、Mの自己限定として現在が現在自身を限定する、場所が場所自身を限定すると考へられると共に、その直線的限定の方向、個物的限定の方向に、無限なる個物的限定の世界を有つと考へられ、その圓環的限定の方向、一般的限定の方向に、無限なる一般的限定の世界を有つと考へられる、即ち現實の世界がいつも無限なる縁暈を有つと考へられるのである。世界はそれ自身の重心を有ち、圓の中に圓を限定し行く、世界は動力學的なると共に靜力學的であると考へられるのである。

右の如く無限に辯證法的に自己自身を限定する世界は、一面に何處までも個物的限定、直線的限定を否定する意義を有するを以て、その圓環的限定として一面に何處までも一般的なる世界個物を否定した世界を有つ。私の辯證法といふのは過程的連續をも否定するものなるを以て、そこに全然時を否定した世界が成り立つ、即ち單なる知識の世界と考へられるものが成立するのである。無論、個物的限定の方向を否定すると云つても、單に個物的限定の方向がなくなるといふのではない。現實の

世界は何處までも辯證法的でなければならぬ、何處までも内的統一の意義が失はれるのではない。唯我々の内部知覺的自己といふものが、その時間的意義を失つて、その個物的意義を失つて、一般的と考へられるのである。現實の世界と考へられる知覺の世界に於ては、既に内部知覺的なるものは外部知覺的、外部知覺的なるものは内部知覺的として、我々は自己同一的に物を見る。そこには物と我とは辯證法的に不可分離の關係を有つて居る。併し絶對辯證法の世界に於て、更に個物的限定の方向が否定せられると考へる時、我と物とは離れる、我と物とは結び附かないものとなる、主觀と客觀とが相對立するのである。是に於て、我々は内部知覺に即しながら、而も物を見るときいふ意味を失つた意識の世界といふものを考へる、而して之と對立的に外界といふものを考へる、單なる客觀界といふものを考へる。斯く全然個物的限定の意義を失つた内部知覺と考へられるものは、何等の意義に於ても自己自身の限定を有つと考へることはできない。それは自己同一的に自己自身を限定する辯證法的世界の絶對の自己否定面に即して考へられる自己肯定面即ち直覺面として、唯映す鏡の如きものと考へるの外ない。我々の意識を單に映すものと考へるのは、斯くして考へるのである。そこにはもはや個物的限定の意義はない、働くものはない、

映されるものは唯物物の影に過ぎない。併し斯く考へられた意識といふのは、唯一種の極限概念であつて、無限に自己同一的に自己自身を限定する辯證法的世界の自己同一面、即ち直覺面と考へられるものは、單にかゝるものではない。若し單にかゝるものならば、それは單なる無と擇ぶ所はない。辯證法的世界に於ては、實際單に映すといふ如きことがあることはできないのである。

無限に自己同一的に自己自身を限定する辯證法的世界の自己同一面即ち直覺面から、その内部知覺的自己の自己限定を何處までも否定したと考へる時、その外部知覺的なるものは上に云つた如く單なる表現の世界とならねばならない。内部知覺的に自己自身を限定するものがなくなると共に、外部知覺的に自己自身を限定するものもなくなる、況して直觀的に物を見るといふこともなくなる。客觀的と考へられても、それは非實在的なる世界に過ぎない。そこには世界が世界自身を自己同一的に限定するか、現在が現在自身を限定するかいふ意味が失はれると考へられるのである。かゝる場合、我々の内部知覺的自己と考へられたもの、個物的限定と考へられるものは、單なる了解的自己と考へる。了解的自己と考へられるものは、何等の自己限定をも有たないものである、映すとも云ふことのできないものである。世

界は何等の内的統一をも有たない、映されるものもないのである。辯證法的に一般者の自己限定として社會的、歴史的世界と考へられるものは、いつもその周邊に、かゝる無限定の世界を有つ。歴史の世界が客觀的に表現の世界と考へられ、主觀的に了解の世界と考へられる所以である。無論、歴史といふも、單に了解によつて成立するのではない。ドロイゼンのいふ様に、歴史的認識の根柢にも、直觀がなければならぬ。歴史は現在から考へられるといふ所以である。

内部知覺的自己の自己限定を何處までも否定した時、右の如き了解的自己といふものが考へられるのであるが、我々の意識と考へるものは、尙内部知覺的自己の自己限定の意義を有つたものである、尙主觀的獨自性の殘されたものである、而もそれが積極的に、何等の自己限定を有つと考へられないから、唯何物かを映すと考へられる。併し内部知覺的自己が自己限定を失つたと考へる時、外部知覺的なるものもなくなる、映されるものもなくなる。外部知覺的なるものは、唯志向の對象として、我々の意識は志向的と考へるの外ない。意識の志向性といふのは、斯くして考へられるものでなければならぬ。意識の志向性といふのも、辯證法的に一般者の自己限定として考へられるのである。この世界は何處までも個物的限定即一般的限定の意義を有

つて居るから、内部知覺的自己に即して、何處までもこの世界を内部知覺的に見て行くこともできる。そこに上にも云つた如く現象學者のザツへの世界といふものが見られる。併しそれは物の世界ではない、我々の自己を否定する意味を有つたものでない。現象學は、尙心理學の立場を脱却しないものである。ザツへはタートザツへから、タートを除去したものである。かゝる立場を進めて、一層深く具體的なる事實の世界、歴史の世界を考へようとするならば、再び右に云つた如き了解的自己の立場に立たなければならぬ、單なる表現の世界を見る立場に復せなければならぬ。了解的自己の立場に於て、唯表現的に自己自身を限定する世界、即ち存在の世界を見る。その底に何處までも客觀的に自己自身を限定するものを見ることはできない、唯無といふものを考へるの外ない。不安といつても、我々を不安ならしめる所以のものが明でない。外部知覺的に物を見るといふことの不可能なるは云ふまでもなく、内部知覺的に本質直觀といふ如きものも考へることはできない。眞理はアレテースとして現れると云つても、その限定せられる所以のものが明でない。私は解釋學的現象學といふものは、かゝるものではないかと思ふ。ロゴスに即して考へられたギリシヤ哲學といふものも、表現的世界の自己限定といふものを考へた。

我々の思惟といふのは、内部知覺的自己に即して意識作用と考へられるものであるが、それは既に行爲によつて物を見るといふ意味を有つたものである、私のいふ如き意味に於ての直觀的過程の意味を有つたものである。思惟の世界といふのは、自己同一的に自己自身を限定する辯證法的世界の一面として、自己同一的に自己自身を限定する意義を有つたものである。思惟の對象界といふものも、客觀的なると共に主觀的である。唯それは何處までも外的なるものに即して、內的なるものを否定する意味を有つたものである、一般的限定に基いて、個物的なるものを否定する意味を有つたものである。現實にあるものは、いつも内部知覺的、外部知覺的として物といふものである。併し知覺的に見られる物といふものでも、それが實在的と考へられるかぎり、單に受動的に見られる心像といふ如きものではなくして、行爲によつて見られたものといふ意味を有つてゐなければならぬ、辯證法的一般者の限定として見られるものでなければならぬ。實在的なるものは歴史的でなければならぬ。それは無限に直線的に、無限に圓環的に限定せられたものでなければならぬ。物は主觀的、客觀的でなければならぬ。我々の行爲といふのは、内から外を限定すること、主觀が客觀を限定することと考へられる。併し我々の行爲はその逆の意味

も有つてゐなければならぬ、外が内を限定する、客觀が主觀を限定する意味を有つてゐなければならぬ。我々が行爲によつて物を見るときは、何處までも主客合一的に物が形成せられて行くことである。辯證法的に自己自身を限定する世界から個物的限定の意義が否定せられた時、我々は單なる意識と考へられる、我々は單に無にして見ると考へられる。かゝる場合、我々の世界は表現的と考へられる。併し辯證法的世界は自己同一的に自己自身を限定するものでなければならぬ。自己同一的に自己自身を限定すると考へる時、そこに現實の世界といふものが考へられる、内部知覺的外部知覺なる物の世界が考へられる。併しかゝる自己同一面は辯證法的世界の自己限定として、絶對に相反する二つの意味を有つてゐなければならぬ。一面にそれは絶對否定の意義を有するを以て、我々はそこに外部知覺的世界を有つと考へる。併し固、内部知覺的ならざる外部知覺といふものはない。それは個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定として、辯證法的に自己自身を限定する世界でなければならぬ。それだけそこに既に現在が現在自身を限定する、世界が世界自身を限定するといふ意味に於て、形成作用といふものが考へられ、直觀といふことすらも考へられなければならぬ。かゝる意味に於て自己自身を

限定する世界に於て、内部知覺的自己に即してその内的統一と考へられるもの、即ち個物的限定面の意味を有つと考へられるものは、單なる意識といふ如きものではなくして、カントの純我の如きものでなければならぬ。單に表現的なるものが自己自身を限定すると考へられる時、意識的には形式論理的思惟といふものが考へられるであらうが、既に現實が現實自身を限定するといふ意義を有する知覺的世界の自己限定に於ては、我々の思惟は客觀的でなければならぬ、科學的でなければならぬ。

自己同一的に自己自身を限定する辯證法的世界から、その個物的限定の意義を否定した時、即ち自己肯定を無と考へた時、我々の意識面といふ如きものが考へられる、而して對象的に表現の世界といふものが考へられる。かゝる意識が全然無限定として、了解と考へられる。併し映すと考へられる時、上に云つた如く既に内部知覺的自己に即して映されるものに對するといふ意味を有つてゐなければならぬ、既に辯證法的世界の自己限定の意味を有つてゐなければならぬ、對象的關係を有つてゐなければならぬ。故に意識は無限定といつても、如何なる場合にも作用的意義を有つて居る。映すといふことも一種の作用でなければならぬ。限定するも

のなき限定無の限定が作用と考へられるのである。意識を映すと考へる時、それは既に内部知覺的自己の自己限定の意味を有つたものである。併し辯證法的世界は何處までも自己自身を否定するものでなければならぬ。そこに映されるものもなくなる。是に於て意識の對象的關係は志向的となる。意識は志向作用と考へられる。而して之に對して客觀的に意味の世界といふ如きものが考へられる。而してかゝる世界の自己同一的限定に於て、我々の意識作用は一面に(自己否定的に)意味附與的と考へられ、一面に(自己肯定的に)意味充實的と考へられる。無論、我々の意識を何處までも無限定と考へる時、單なる了解作用として、客觀的には、唯無限に無限定なる世界、無の世界といふものが見られるであらう。併し我々の意識が内部知覺的自己に即して映すと考へられる時、既に自己同一面的限定の意義を有し、現象學者の明にした如き種々なるノエシスの構造が考へられるのである。而してかゝる意識に對立して、客觀的には表現的なるものの自己限定の世界が考へられねばならぬ、ロゴスの自己限定の世界、論理の世界といふものが考へられねばならぬ。(アリストテレスは既に個物といふものまで考へようとしたが)ギリシャの論理といふのは、一體に辯證法的一般者の個物的限定の意義を否定したもので、即ちその自己同一的限定面を

映す意識面と考へたものと云ふことができる。今日の現象學はその意識面的構造を明にしたものといふことができる。前者はかゝる一般者の限定として客觀的世界を論じ、後者はかゝる一般者の限定として意識の世界を論じたといふことができる。併しカントの先驗論理といふのは、さういふものではない。それは知覺的世界の論理である、實在の世界の論理である。カント哲學に於て、內的感官といふものがその役目を演じてゐないのである、内部知覺なくして外部知覺といふものもない。併しそれは唯外部知覺に即して考へられて居るに過ぎない、内部知覺的なるもの獨立性が認められて居ない。ギリシヤ哲學に於ては、之に反し眞に外部知覺的なるものは考へられてゐない。

自己同一的に自己自身を限定する辨證法的世界の自己同一面といふものは、いつも内部知覺的外部知覺的であり、直觀的に物を見るといふ意味を有つて居る。かゝる立場から内部知覺的限定を極小として、即ち受働的として、外部知覺的限定の世界を考へる時、物質の世界といふものが考へられる。かゝる世界といへども、内部知覺的なるものを、全然除去することはできない。併し内部知覺的なるものは何處までも受動的と考へられる、即ち單に感覺的と考へられる。かういふ世界からも、それが

實在的と考へられるかぎり、個物的限定といふものを除去することはできぬ。併し時といふものは、單に直線的と考へられ、瞬間的と考へられる。かういふ世界に於ては、直觀的に物を見るといふことは考へられない、知覺的に見られるものは却つて心像に過ぎないと考へられる。直覺と理解力とを統一する想像力といふものが考へられても、單に圖式的であつてそれは具體的に物を見るといふ意味を有つことはできない。かゝる世界に於て見られるものは、唯、法則的なるものに過ぎない。かゝる世界は唯、法則的に自己自身を限定し行くと考へられるのである。それが自然と考へられるものである。カントが純粹理性批判の「アナリタイク」に於て考へた世界はかゝる世界であつたと思ふ。併し外部知覺的なるものは、同時に内部知覺的でないければならない。物は内部知覺的外部知覺的でないければならない。かういふ立場から個物的なるものを包まうとする時、勢、私の所謂物を見るといふ立場に入つて來なければならぬ。現在が現在自身を限定するといふ立場に近いて來なければならぬ。斯くして合目的的世界といふものが考へられる、規定的判断の一般者は反省的判断の一般者の形を取らなければならぬ。特殊の一般者が與へられて、一般的なるものが見出されると考へられる。之に反し西南學派に於て云ふ様に、反對の

極限に個物的なるもの、唯一的なるものを考へれば、反省的一般者といふ如きものも考へられない。歴史の世界は合目的の世界でもない。唯、一度的なるものが考へられるまでである。そこには内部知覺的なるものもなく、従つて外部知覺的なるものもなく、對象的なるものは、單に表現的なるものと考へられなければならぬ。現在が現在自身を限定すると考へられる辯證法的世界の自己同一面から、外部知覺的方向に自然といふものが考へられ、内部知覺的方向に歴史といふものが考へられる。併し自然といふも何處までも内部知覺的なるものを離れたものでなく、歴史といふも何處までも外部知覺的なるものを離れたものではない。兩者共に行為によつて物を見るといふ立場から考へられるものである。兩者の底に一つのものを考へるならば、それは私の所謂現在が現在自身を限定するといふ無限なる直觀的限定の底に見られるものでなければならぬ、表現的世界の自己限定の底に見られるものでなければならぬ、直線的限定はその極限に於て圓環的、圓環的限定はその極限に於て直線的といふ所に考へられなければならない。

私は客觀的思惟に於て行為によつて物を見ると云つても、唯無雜作に行爲と思惟

とを一つに考へるのではない。行爲に於ては主觀が客觀を限定すると考へられ、思惟に於ては客觀が主觀を限定すると考へられる。さういふ意味に於ては、兩者相反する意味を有つといふこともできる。思惟と行爲とは如何なる關係に於て立つものであらうか。我々の意識的自己といふものは、先づ直線的に考へられる、即ち個物的に考へられる。併し單にそれだけにて我々の意識的自己といふものが考へられるのでなく、圓環的に限定する意味がなければならぬ。記憶といふものが、既にかゝる意味を有つたものである。我々は現在に於て、いつも外部知覺的なるものに接して居る、自己を否定するものに觸れて居る。然らざれば現在といふものはない。かういふ意味に於ては、現在は過去未來を否定する、我々の意識的自己といふものを否定する。かういふ意味に於ては、我々は現在に於て過去を想起するといふことは不可能でなければならぬ。併し我々は我々の過去を想起する、記憶といふものなくして自己といふものはない。我々の過去は何處に保存せられ、何處から再現するのであらうか。それは外部知覺的なるものに於て、所謂物質に於てあると考へることとはできぬ。物質は意識を否定するものである。外部知覺的世界も空間的として圓環的と考へられるが、意識の世界の圓環的限定といふのはそれを否定するもので

ければならない。それは外部知覺的空間を否定する空間、外部知覺的現在を否定する現在でなければならぬ。併し外部知覺的なるものを否定すれば、内部知覺的なるものもなく、内部知覺的なるものを否定すれば、外部知覺的なるものもない。故に二つの空間、二つの現在といふものがあるのではなく、現在が現在自身を限定するといふことから、内部知覺的、外部知覺的なるものが考へられるのである。我々の内部知覺的自己といふものも、場所が場所自身を限定するといふことから考へられるといふ所以である。内部知覺に即して考へられるかゝる限定を、私は一般的に行爲といふのである。かういふ意味に於て、我々の想起と考へられるものも、行爲の意味を有つてゐなければならぬ。想像といふものに至つては、尙更さういふ意味を有つて居る、創造的とも考へられる。唯、それは絶對否定によつて物を見るときに到らないのである。併しこの人間の世界では、絶對否定によつて物を見るときには不可能である。それには我々は絶對に死ななければならぬ、人間的なるものを絶對に否定せなければならぬ。唯、内部知覺に即しながら、現在が現在自身を限定するといふ意味に於て、我々が外に物を見ると考へられるかぎり、我々は行爲すると考へるのである。

私は我々の意識的自己といふものが、單に直線的にのみ考へ得るものでなく、圓環的に考へられるものでなければならず、それは場所が場所自身を限定するといふ意味に於て、行爲の意味を有つてゐなければならぬと云つた。そして記憶といふ如きものでも、既に行爲の意味を有つてゐなければならぬと云つた。併し我々の自己といふものは單に記憶によつて成立するものでない。我々の自己はその根柢に於て衝動的でなければならぬ、無限なる要求でなければならぬ。我々が我々の底に見る無限に衝動的なるものも無限に暗いものでなければならぬ。それは我々の自己を否定する意味を有つたものでなければならぬ。併しそれは我々が單に外部知覺的對象として考へる物質といふ如きものではない。それは我々の自己を否定すると共に肯定する意味を有つたものでなければならぬ。それを外部知覺的なる物質から起ると考へるのは誤である。それは私の所謂場所が場所自身を限定するといふことから考へられるものでなければならぬ。それは何處までも一般的として個物的なるものを否定する意味を有すると共に、個物的なるものを肯定する意味を有つたものでなければならぬ。辯證法的世界の自己限定は先づ我々に衝動的と考へられるものである。私が此處に衝動的といふのは、合目的といふ

ことを意味するのではない。辯證法的否定は絶對でなければならぬ。それには、一面に偶然的といふ意味がなければならぬ、運命的意義がなければならぬ。我々が生れるといふことが、既に宇宙的衝動によつて生れると考へることができる。更に廣き意義に於て、何等かの意義に於て與へられるものが我々を限定するといふことを衝動的と考へることもできる。無論、衝動的といふのは普通には爾解せられないであらう。併し衝動といふのは單に我々の意識的自己から起ると考へることもできない、又單に物質から起ると考へることもできない。衝動といふものが考へられるかぎり、右の如く考へられねばならない。而して衝動といふものなくして、我々の自己の存在といふものは考へられないのである。

絶對の否定即肯定として辯證法的に自己自身を限定する世界の自己限定が、右に云つた如き意味に於て衝動的と考へられるならば我々の行爲と考へられるものは宇宙的衝動によつて基礎附けられると考へられねばならない。そこに無限なる魂の世界といふものが考へられる、無限なる夢の世界といふものが考へられる。そこから種々なる心像といふ如きものが見られるのである。併し我々は斯く意識的自己の底に衝動的なるものを見、衝動的なるものによつて我々が限定せられると考へ

るが、衝動的なるものは我々を肯定すると共に我々を否定する意味を有つてゐなければならぬ。衝動それ自身が自己矛盾である。之を何處までもその否定の方向に押し進めて考へれば、その極限に於て我々を越えたもの、我々を否定するものに撞着すると考へなければならぬ。多くの人はそれをも又物質と考へて、單に外部知覺的方向に考へたものと混同する。併し單に外と考へたものと、内の底に外と考へたものとは、異なつたものでなければならぬ。内の底に考へられるものは、何處までも我々を否定すると共に肯定する意味を有つたものでなければならぬ。それは絶對に我々を殺すと共に我々を生むものでなければならぬ。我々の思惟といふものは、右の如き極限に於て成立するのである。我々は内の底に内を越えたものに撞着する、即ち絶對の外に撞着する。そこに内部知覺に即して場所が場所自身を限定するといふ意味に於て考へられる行爲である。故に思惟自身が大なる自己矛盾である。それは外を内に見ようとするものである。衝動と考へられるものが、我々の自己を否定すると共に肯定する意味を有するを以て場所の自己限定と考へられる。思惟といふのはかゝる否定の極限に於て考へられるものである、即ち衝動的限定に於て、その否定を極大となし、肯定を極小としたものである、我々の自己意識の圓

環的限定を極大となし、直線的限定を極小としたものである、故にそれは行爲に於て内部知覺的なるものを極小としたものとも考へることが出来る。絶對否定の立場に於て尙一層内部知覺的なるものを否定するとすれば、嚮に云つた如き單なる意識の世界といふ如きものが考へられるであらう。併し思惟に於ては何處までも行爲的に物を見るときふ意味がなければならぬ。而もそれは内部知覺的なるものを極小としたものであるから、何處までも見ることができないのである。辯證法的に自己自身を限定する世界は無限に衝動的と考へられ、行爲的に物を見るときふ意味を有つて居る、即ち直觀的に自己自身を限定する、而して無限の縁暈を有つて居る。その行爲的限定の否定的方向に、即ち辯證法的世界の圓環的限定に即して、思惟といふものが考へられるのである。それは物を見るときふ意味を有しながら、何處までも見ることのできない行爲である。無論、その反對に個物的限定、直線的限定に即して自由意志といふ如きものが考へられるであらう。それも亦物を見るときふことのできない行爲である。思惟とは右の如く内部知覺的なるものを極小とした行爲なるを以て、外部知覺的に我々を限定する物質の世界と考へられるものは、思惟的行爲によつて見られる世界といふことができる。併し辯證法的世界は更に絶對否定

の意義を有するを以て、一層包括的立場から、この世界は表現的に自己自身を限定すると考へられ、思惟は表現的世界の自己限定と考へられる、ロゴスの自己限定と考へることが出来る。場所的限定の意味に於て與へられたものが我々を限定するものが、先づ衝動的と考へられると云つたが、かゝる意味に於て表現的なるものは我々を動かすもの、行爲的なるものといふ意味を有することも考へることが出来るであらう。無論、それは内部知覺的に與へられるのでなく、唯意識的に與へられるといふに過ぎない。背理の様だがそれは否定的に與へられるのである。

辯證法的世界の自己限定に於ける思惟の位置については、箇「七」に於て述べることにする。

六

衝動といふのは、唯我々の意識から起ると考へることはできない。然らばと云つて、それは單に物質から起るとも考へることもできない。我々は我々の底に無限に深い衝動的なるものを見るのである。それによつて我々の自己が實在的と考へられるのである。行爲に於ては云ふまでもなく、記憶と云つても、内部知覺と云つても、その底に衝動的なるものが考へられなければならない。併し斯く我々の自己を肯

定すると考へられる衝動的なるものは、又我々の自己を否定する意味を有つたものでなければならぬ。衝動は我々の自己と考へられるものと同じく、自己矛盾である。それは我々の自己を肯定するといふ意味に於て、何處までも個物的であり、それは我々の自己を否定するといふ意味に於て、何處までも一般的である。衝動は辯證法的一般者の自己限定として考へられるといふ所以である。我々の生物的生命といふものを考へても、生物的生命は種族的でなければならぬ。子は親から生れる、生物は生物から生れる。併し生命は斯く個物を生むといふ意味を有つて居ると共に、一面に個物を否定する意味を有つてゐなければならぬ。死といふことも生物の本能の一種である。生命は個物を肯定すると共に否定する意味を有つたものでなければならぬ。生命が種族的であるといふことはかゝることを意味して居るのである。生命の底には、否定即肯定、肯定即否定なるものがなければならぬ。普通にはそれを物質といふ様に考へられるのであるが、單に物質と考へられるものは、生命に對して唯、否定的意義しか有し得ないものである。かゝる意味に於て生命の成立といふものを徹底的に考へるならば、生命の底に絶対否定即肯定、絶対肯定即否定といふものを考へなければならぬ。無論、生物の衝動的な生活、或はその組織せられ

た本能的な生活といへども、尙眞に生命の意義を有つたものではない。動物は眞の個物ではない。生物的生命の一般者は尙何處までも個物を肯定するものとは云はれない。生物的生命の底に自然といふ如きものが考へられる所以である。併し眞の生命の一般者は何處までも個物的に自己自身を肯定するものでなければならぬ、我々の人格的自己をも肯定する意味を有つたものでなければならぬ。かゝる生命の成立の底には、絶對辯證法の一般者といふものが考へられなければならない。眞の生命はかゝる一般者の自己限定として成立するのである。而してかゝる一般者の自己限定といふものは、如何なるものであるか。それは自己同一的に現在が現在自身を限定するといふことから考へられるものでなければならぬ。生命の起源は無限の過程の底に求むべきでない。さういふ所に生命の根柢があるのでない。生命の根柢は無限の過去に求むべきでもなく、無限の未來に求むべきでもない。この現實の世界が絶對否定即肯定と考へられる所に、眞の生命といふものが考へられるのである。かゝる世界の自己限定が個物的限定即一般的限定、一般的限定即個物的限定として、無限の生命と考へられるのである。

私は我々が知覺の世界と考へるものに於て、内部知覺的、外部知覺的として、自己同

一的に物を見ると云つた。知覺の世界と考へられるものは、外部知覺的方向に傾いたものではあるが、而も尙直觀の世界、現實の世界といふ意味を有つたものである。普通に我々は知覺の世界といふものを考へる時、我々は直接の世界、現實の世界を考へないで、既に知識化せられた世界を考へて居るが、直接の世界は先づ衝動的と考へられるものでなければならぬ。動物の世界といふものは、然るものであらう。衝動は自己矛盾である、そこには既に内と外との對立がなければならぬ。併し動物は尙、内といふものを有たない、内部知覺的なるものを有たない、従つて外部知覺的なるものも有たない。故に動物には現實に物を見るといふことはない。動物は客觀界といふものを有たない、世界といふものを有たない。動物の世界は夢の世界である。動物は物の代りに、唯心像を有つ。併し、心像が動物の世界の物であるといふこともできるであらう。之に反し、我々が内部知覺を有つ時、外部知覺を有つ、そして衝動的に物を見ると考へられる。併し衝動といふものが、上に云つた如く既に辯證法的世界の自己限定として考へられるものでなければならぬ。外部知覺的なるものに基礎を置いて考へれば、我々も衝動的と考へられるかも知らぬが、衝動の底に絶對の否定即肯定がなければならぬ。その底はこの現在にあるのである。我々がこの

現在に於て外部知覺的に對するものが、絶對否定面であるのである、物質であるのである。而してそれが即内部知覺的として、絶對否定即肯定的に衝動的と考へられるのである。世界の底は、辯證法的世界が自己自身を限定する、乃ち現在が現在自身を限定する所にあるのである。それは底なき底とも云ひ得るであらう。そこに物自體の如きものが考へられるのである。この現實に自己自身を限定する世界をその否定面を基礎として考へる時、衝動的世界と考へられる。衝動といふのも、行爲の意味を有つてゐなければならぬ。更に之を絶對否定面に於て考へれば、無限の過去から無限の未來に自己自身を限定し行く物方の世界と考へられるであらう。之を絶對肯定面に於て考へれば、無限なる合目的世界精神の世界と考へられるであらう。併し我々はこの現實の世界に於て、外部知覺的に絶對の否定面に對し、内部知覺的に絶對の肯定面に對して居るのである、一面に物質に對し、一面に精神に對して居るのである。現在が現在自身を限定すると考へられる所に、無限の過去があり、無限の未來がある。世界は現在の中に始まつて、現在の中に消え行くのである。故にカントのアンチノミーに於ての様に、世界の始があるとも云へない、又ないとも云へない。辯證法的物質といふのは、かゝる現實の世界に於て見られるものでなければな

らない、即ち行爲によつて見られるものでなければならぬ。知覺的に見られる物といふのは、辯證法的といつても、尙外部知覺に偏したものとたるに過ぎない。之に反し、藝術的に見られる物といふのは、内部知覺に偏したものと云ひ得るであらう。現在が現在自身を限定することから、無限の過去、無限の未來が考へられると云へば、唯無限に過程的に現在が現在自身を限定し行くと考へられるかも知れない。併し現在には瞬間ではない。それはいつも行爲によつて物を見るといふ意味を有する直觀面でなければならぬ。それは有限の世界である、それに於てあるものは皆有限なるものである。そこにいつも現實の世界といふ意味があるのである。實在の世界といふものは無限の世界から考へられるのでなく、いつも有限の世界から考へられるのである。無限を基礎として有限を考へる時、この世界は辯證法的でない。現在といふものは、唯、静止したものでない。さういふものならば、それは現實の世界ではない、現在といふものでもない。現在は現在自身を無限に直觀的に限定し行くのである。故に世界は創造的である。我々はそれを行爲によつて物を見ると考へるのである。行爲といへば、主觀的と考へられるが、行爲は單に主觀的に起るのではない。それは世界の自己限定として生起するものでなければならぬ。主客合一の

力がこの世界を限定し行くのである。それが一步一步に物を見る直觀的過程と考へられるものである。藝術的直觀の過程と考へられるものは、右に云つた如く唯、その内部知覺的方向に即して考へられる一種の內的直觀に過ぎない。普通に考へられる如き單に受動的に物を見るといふことは、眞の直觀ではない。それは物を見るのではなくして、唯、心像を見るのである、唯、衝動的に物を見るのである。

私は辯證法的世界の自己同一的限定といふものを明にするため、先づ内部知覺的外部知覺的なる知覺の世界といふものを考へた。そしてそれが自己同一的に物を見ると云つた。併し知覺の世界と考へられるものは、外部知覺的なるものに偏したものでなければならぬ。眞に辯證法的世界は、外部知覺的たると共に、何處までも内部知覺的でなければならぬ、何處までも個物的限定、直線的限定の意義を有つてゐなければならぬ。この世界は絶対に相反する兩面の自己同一でなければならぬ。生物的生命の世界といふのが、既に種族的として衝動的に自己自身を限定する意味を有つて居るのである。それは既に個物的限定の意義を有つたものでなければならぬ。併し更に個物的限定の意義、内部知覺的限定の意義の深くなつ

たもの否、内部知覺的限定の意義が獨立と考へられるものが、我々人間の世界と考へられるものである。我々も何處までも動物である。人間となつたからと云つて、我々は動物でなくなるのでもない。加之、我々は何處までも物質ですらあるのである。併し我々は單に動物の如く衝動的ではない。我々は内部知覺的に獨立すると共に、内部知覺的、外部知覺的に物を見るのである。我々は主客合一の世界を有つのである、客觀界を有つのである。而して我々の自己といふものは、そこから考へられるのである。我々は内部知覺的に獨立すると云つても、單なる個人といふものが考へられるのではない。私は汝に對することによつて私であるのである、個物は個物に對することによつて個物であるのである。我々の自己は社會的でなければならぬ。我々の自己は唯、個物と個物との媒介者Mの自己限定として考へられるのである。眞の個物といふものは、我々の人格的自己と考へられるものの外にないのである。さういふ意味に於ては、絶對辯證法の世界は、その根柢に於て我々の人格的自己を限定する意味を有つてゐなければならぬ。知覺の世界に於ては、外部知覺的に物を見、内部知覺的に自己を見ると考へられるのであるが、絶對辯證法的に自己自身を限定する世界に於ては、更に之を越えて外部知覺的方向に表現の世界を見、内部知覺的

方向に抽象的自由意志の世界を見るのである。表現の世界といふのは單に物質の世界ではない。物質の世界といふのは外部知覺的方向といつても、それが内部知覺的なるものを離れないかぎり考へられるものである。我々の行爲的自己と考へられるものは、内部知覺的に個人的であると云つても、それが外部知覺的なるものを離れないかぎり考へられるものである。内部知覺的、外部知覺的なる行爲的直觀の世界を越えたと考へられる時、一般的限定は一般的限定の意義を失ひ、個物的限定は個物的限定の意義を失ふ。一般的限定の方向に無限定なる表現の世界といふものが考へられ、個物的限定の方向に無内容なる抽象的意志といふものが考へられる。而して後者は個物的限定といふ意義をも有たないものである。嚮に辯證法的世界の個物的限定の意義を何處までも否定したものが我々の意識面と考へられるものであると云つたが、抽象的自由意志とはかゝる意識面の個物的限定といふ意味を有つたものである。意識面は志向的であり、了解的であり、その自己限定として自由と考へられる。

我々の歴史は原始民の社會から始まる。原始民の社會といへども、それは全く動

物の社會と異なつたものでなければならぬ。それは既に主客合一的に物を見る世界でなければならぬ、行爲的直觀の世界でなければならぬ、ポイエシスの世界でなければならぬ。無論、それは自己同一的に自己自身を限定する辯證法的世界といつても、尙一般的限定の意義が主となつたものであらう。併しそれは既に個物的限定と一般的限定とが辯證法的に對立し、而もそれが一である世界でなければならぬ。かゝる統一が民族的統一と考へられるものである。それは如何に動物の本能的社會と類似すると考へられても、根柢からそれと異なつたものでなければならぬ。多くの人は原始民の社會が動物の本能的社會の如きものから發展するかの様に考へるかも知らぬが、後者から前者が出て來るのではない。外部知覺的なるものから内部知覺的なるものは出て來ない。現在が現在自身を限定するといふ立場から、外部知覺的方向に無限の過去といふものが考へられ、内部知覺的方向に無限の未來といふものが考へられるであらう。かゝる立場からは、動物の本能的社會といふ如きものが原始民の社會の過去に見られるのである。更にその過去に物質の世界といふものが考へられるであらう。原始民の社會が成立したからと云つて、外部知覺的なるものがなくなる譯ではない、物質的限定は云ふまでもなく、本能的支配

をも脱するのではない。併し原始民の共同意識も既に動物の本能とは異なつたものでなければならぬ。原始民の家族的團體といふも、蟻や蜂の家族的團體と同一とは考へられない。それは人倫的意義を有つたものでなければならぬ、ガイステイトでなければならぬ。辯證法的世界が既に個物的限定の意義を有すると云つても、尙衝動的にして未だ物を見るときいふに至らない時、それはゼーレの世界と考へられるであらう。併し既に行爲的に物を見るとき考へられる時、それはもはやゼーレの世界ではなくして、ガイストの世界でなければならぬ。直線的限定が圓環的限定の意義を有するのが客觀的精神である。民族的精神といふものも、既に内部知覺に即して直線的限定が圓環的限定の意義を有つと考へられるものであるが、それは尙外部知覺的なるものに即して圓環的限定に基礎を有つと考へられるものであり、客觀的精神といふものは、之に反し直線的限定に基礎を有つと考へられるものである。さういふ意味に於ては、兩者相反するものとも考へられるのである。斯く云ふも、私には客觀的精神といふものが、外部知覺的なるものを離れて成立すると云ふのではない。知覺の世界に於て外部知覺と内部知覺の對立から、客觀的精神といふものはその内部知覺の方向に考へられて行くものであるが、何處までも内部知覺的なるもの

と外部知覺的なるものとは相離れるのではない。我々の意識は何處までも物質に沿うて擴がる、意識と物質とはMの兩面である。かゝる辯證法的世界の自己限定として行爲によつて物を見ると考へられる時、先づ衝動的に無意識的意識の世界が考へられ、更にゼーレの世界が考へられ、その内部知覺的方向の極限に於てガイストの世界が考へられる、即ち人格的世界が考へられるのである。併しそこまで行つても、外部知覺的なるものを離れるのではない、何處までもMの自己限定として考へられるのである。何處までも物質的なるものを離れるのではない、それを離れば實在的でなくなる。斯く云ふも、私は唯物論者のいふ如く、物質的なるものを實在的と考へて、精神的なるものを非實在的と考へるのではない。實在的なるものは、すべて主觀的・客觀的でなければならぬ、即ち私の所謂物でなければならぬ。外部知覺的方向の極限にのみ考へられるのは、却つて非實在的なるものに過ぎない、それは抽象的な世界に過ぎない。外部知覺的なるものを否定したものが實在的でない様に、内部知覺的なるものを否定したのも實在的ではない。經濟社會といふ如きものといへども、内部知覺的なるものを否定して成立するものではない、我々の物質的要求を基礎として成立する社會である。内部知覺的なるものを許すといふことは、既に

ガイストを認めるといふことでなければならぬ。内部知覺的なるものは、外部知覺的なるものから出て來ない、物質から意識は出て來ない。物質的要求の世界といふのは、私の云ふ如き辯證法的世界の自己限定の意味に於て、衝動的世界から考へられるものでなければならぬ。故に主觀が客觀を限定し、客觀が主觀を限定する。唯、それは圓環的限定を主としたもの、外部知覺的なるものに沿うて考へられたものに過ぎない。

從來、社會といへば、歴史の横断面といふ如きものが考へられて居る。併し具體的なる社會は、歴史的でなければならぬ。之に反し、歴史は社會的でなければならぬ。辯證法的一般者の限定としての具體的なる世界は、社會的歴史的でなければならぬ。原始民の共同社會といふのは、かゝる意味に於てそれ自身一つの具體的世界の意味を有つてゐなければならぬ。私は汝であり、汝は私であり、共同的に物を見共同的に物を聞く。神話は宗教であり、法律道德でもあり、科學でもあつた。今日の科學の立場から見れば原始民族の神話は荒唐無稽と考へられるであらう。併し原始民族は外部知覺的なるものを神話的に説明したのである、而して一つの統一せられた世界に住んで居たのである。今日の我々の社會といへども、原始民の共同社

會の意義を失つて居るのではない。何處までも一面に歴史的であり、直線的でなければならぬ、然らざれば實在的社會でない。今日の科學といへども、歴史を離れて抽象的に存在するのではなく、今日の社會的歴史の立場に於て、即ち今日の世界の立場に於ての外部知覺的なるものの説明に過ぎないものである。故に今日の科學といへども、固より絶對ではない。併し斯く云ふも私は數學や物理學なども、經濟社會を基礎として考へようと云ふのではない。原始社會といふのは既に辯證法的一般者の自己限定として、一つの世界と考へられるものであるが、それは尙十分に辯證法的に自己自身を限定するに至らない世界である、云はゞ未發展の状態にある世界である、自然的と考へられる所以である。併し辯證法的に自己自身を限定する世界は、何處までも個物的限定の方向に深くなると共に、一般的限定の方向に廣がり行かねばならない。テンニースの所謂ゲマインシャフトからゲゼルシャフトに移り行くと考へねばならない。然る場合、古き社會の内的統一は毀され行くと考へられねばならぬ、その直線的限定が否定せられると考へられねばならぬ。そこに直線的限定の否定せられた立場といふものが出て來る、純なる思惟の立場といふものが出て來る。科學はかゝる立場の上に立つものでなければならぬ、即ち辯證法的世界の自

己限定に於て、直線的限定を否定する立場の上に立つものでなければならぬ。一つの社會が自己自身を否定してゲマインシャフトからゲゼルシャフトに進むといふには、外部知覺的なるものに基礎付けられた物質的要求の社會的組織、經濟社會の組織の變化發展といふものが大なる役目を演ずるであらう。併し純粹思惟といふのは、物質的要求の立場と異なつた立場の上に立つものでなければならぬ、上に云つた如き意味に於てのガイストの立場の上に立つものでなければならぬ。物質的要求を基礎とした世界の自己限定として純粹思惟といふものは考へられない。物質的要求の社會といふも、それが辯證法的として人間の社會と考へられるかぎり、上に云つた如くそれは逆に直線的限定として、何處までも圓環的限定を否定する意味を有つてゐなければならぬ、衝動的なるものを否定する意味を有つてゐなければならぬ。斯くして始めて我々の社會が眞に辯證法的存在といふことができる。純粹思惟が直線的限定を否定する立場に立つといふことは、物質的要求の立場に立つといふことと同一でない。却つて兩者は辯證法的に結合するのである。辯證法的社會がその自己限定に於て、直線的限定を否定して行くといふことは、外部知覺的に物質的要求の世界となる、衝動的となるといふことを意味すると共に、内部知覺的

に合理的となるといふことを意味するのである。

辯證法的世界は一面に何處までも自己自身を否定する、圓環的に自己自身を限定する、外部知覺的方向の極限に於て物質的なるものに撞着すると考へられるであらう。併しそれと共に、内部知覺的方向の底に何處までも深いものが考へられなければならない。世界は何處までも歴史的でなければならぬ、直線的でなければならぬ。眞の物自體といふものは、内部知覺的外部知覺的なるものの底に、行爲的直觀の底に現在が現在自身を限定するといふ意味に於て見られるものでなければならぬ。世界はそこから始まるのである。原始民の社會といふものは、比較的それ自身に於て纏つた一つの直觀的世界の意味を有つものであらう。併しそれは既に辯證法的世界の自己同一的限定として成立するものであり、右に云つた如く、それは何處までも自己自身を否定して行く。是に於て、種々なる社會が對立し、又種々なる團體的社會と團體的社會とが對立する、直線的限定の否定せられた無限なる圓環的限定的世界が成立する。かゝる世界に於て直線的限定の意義を有するものは、内部知覺外部知覺的なる行爲的直觀の内部知覺的限定の意義を極小としたもの、即ち内部知覺の自己否定の極限と考へられるものでなければならぬ。そこに思惟といふ

ものが出て来る。世界は合理的となる、そこに當爲の世界といふものが考へられる。併し辯證法的世界は唯否定の一面にのみ考へられるものではない。世界は何處までも自己同一的に自己自身を限定する、直觀的に自己自身を限定する、社會は行爲的に自己自身を限定する。原始社會の底に直觀的限定と考へられたものは、何處まで行つても、我々の歴史の社會の底から我々を限定するものでなければならぬ。歴史の社會は何處までも直線的圓環的に自己自身を限定する意味を有つたものでなければならぬ。思惟の立場から云へば、それは何處までも非合理的と考へられるものでなければならぬ。併しそれは單に外部知覺的方向に考へられる物質といふ如きものではない。それは寧ろ宇宙的衝動として、始から一面にノエシスの限定の意義を有つたものでなければならぬ。絶對否定を通して現れ来る直線的限定の内容といふものが文化と考へられるものでなければならぬ。ゲ・マイン・シャフトがゲゼルシャフトの否定を通して文化的社會となる、人格的社會となるのである。科學といふものも一種の文化財である。動物の本能的社會から文化的社會に至るまで、辯證法的世界の自己同一的限定として考へられるものでなければならぬ。文化的社會といふものが、永遠の今の自己限定として眞に物を見て行く社會である、

行爲的直觀の世界である。而してそれは現在が現在自身を限定するといふことから、常にそれ自身を肯定すると共に否定し行くと考へられるのである。併しそれは單に物質的要求の社會のイデオロギ―と考へられるものではなくして、いつもそれ自身の意義を有つたものでなければならぬ。文化が否定を通して現れる直線的限定といふのは、單なる直線的限定から起るといふ意味ではない。辯證法的世界の自己限定としては、直線的なるものは圓環的でなければならぬ、行爲的でなければならぬ、然らざれば單にイデー爾たるに過ぎない。唯、物質的要求の社會といふものは直線的限定の意義を外部知覺的なるに即して衝動的に考へられたものに過ぎないのである。無論、内部知覺と外部知覺と相即的であるから、いつもさういふ見方が成立するでもあらうが、それは具體的な社會的・歴史的實在の見方ではない。文化はさういふ社會の自己限定の内容として考へられるものではない。(未完)